

相続から墓、死生観。限りある人生を前向きに生きる

明治28年11月14日第3種郵便物認可
第6492号 2013年10月26日発行
毎週土曜日発行(10月21日発売)
ISSN0918-5755

Weekly
Toyo Keizai

週刊 東洋経済

2013
10/26

定価 690円

<http://toyokeizai.net>

終活

いま知りたい

葬儀

まで

相続税

から



>>> 終末期医療を家族で考える

「平穏死」は自宅でも可能 元気なうちから準備を

患者の自宅で診療を行う、長尾和宏・長尾クリニック院長

撮影 山内信也

兵

庫島尼崎市に住む松田充弘さん(享年80)を自宅で看取った。

転倒が原因で俊子さんが寝たきりになったのは約4年前。充弘さんは当初、軽度の認知症を患い始めた父と自分の二人で俊子さんを介護するのは難しい、と考えていた。

しかし、地域の診療所である長尾クリニックの存在を知り、充弘さんは俊子さんを自宅で療養させようとした。在宅医療に力を入れる長尾クリニックの医師や看護師、地域のケアマネジャー、遠方に住む妹や弟らと連携し、充弘さんは働きながら俊子さんの療養を支えた。

自宅での生活を始めてから体重が10キログラムも戻るなど、俊子さんは驚異的回復を見た。冗談が好きで、診察に来た長尾和宏院長や家族を笑わせることも、度々あったという。

死は突然に、だが、とても平穏な形で訪れた。8月4日の深夜、俊子さんは「プリンが食べたい」と充弘さんへ呼んだ。翌日仕事のある充弘さんに「おまえ、体だけは気をつけや。ありがたう」と声をかけたという。朝9時すぎ、充弘さんがいつものように様子を見に行くと、俊子さんは息を引き取っていた。

俊子さんのように自宅で平穏な死を迎える例は珍しくない。たとえ末期がんであっても、モルヒネの投与

など適切な緩和ケアを施すことで、QOL(生活の質)を保ちながら最期を迎えることが可能になった。

延命治療希望は少数派 家族の理解が不可欠

1977年を境に、自宅で亡くなる人の数が病院で亡くなる人の数を下回り、右肩下がりが続いている。現在では約8割の人が病院で最期を迎える。

終末期の緩和ケアを充実させる病院は徐々に増えてきた。ただこれまでは、病院はあくまで治療の場だった。医師は患者を懸命に治療し、一日でも長く生かそうとする傾向が強い。口からものを食べられなくなつた患者の胃に直接栄養を補給する「胃ろう」が、終末期で認知症を併発した患者に取り付けられている実態は、まだ多く見られる。

実際に自分が死を迎えるとなるとどうか。厚生労働省が約6900人を対象に実施した、「人生の最終段階における医療に関する意識調査」(2012年)によれば、がんや認知症の終末期において、人工呼吸器や胃ろうによる延命治療を望む人は少数派だったのだ。

かつて研修医として救急病院に勤務した経験のある長尾院長は、延命治療によって苦しんで亡くなる患者を多く見てきた。「何をもつて終末

期とするかの判断は難しい。しかし、どこかで「ギアチェンジ」をしなければならぬ。終末期に入ると、延命治療をすることで苦痛が増大し、命が縮まるケースもある」と長尾院長は警鐘を鳴らす。

「自宅に帰るだけで患者さんの表情が変わる」(長尾院長)。終末期でも、大抵の患者は死ぬ直前まで、ものを食べたり笑ったりできるという。「自宅であれば好きな音楽を聴き、好きな食べ物を食べたいときに食べられる。酒もたばこも、友達を呼ぶのも自由」(同)。

死の5〜6日前からは食べられる量が減ることが多い。もし病院ではなく自宅で最期を迎えたいなら、死の間際になって自宅に戻るのではなく、自宅に戻った時点で1カ月程度の余命があるほうがいいという。

在宅療養を希望する場合は、何よりもまだ対象者が元気なうちに、在宅医を探しておくことが必要になる。定期的な訪問診療だけでなく、容態が急変しても往診に対応できる医師を選びたい。

家族の理解と覚悟も不可欠である。リビングウィル(終末期医療に関する生前の意思)を事前に書いておき、家族と共有することがその近道だ。本人が生前の希望どおりに死を迎えれば、看取る家族も納得して送り出すことができる。

遺族の気持ちを和らげる仕事もある エンバーマーと入棺体験 日常で「死」と向き合う

ジャーナリスト・海部隆太郎

近 親者を亡くした遺族は、生前と同じ姿で故人を見送りたいと願う。だが交通事故や災害、病気で損傷した遺体は、生前の姿とは異なる。そうした際に遺族の願いをかなえるのが、遺体を修復し保存する、「エンバミング」（遺体保全修復）と呼ばれる科学的技術だ。その技術を学ぼうとする若者が近年増えているという。

日本でエンバミング技術を教えているのは、首都圏と大阪府にある専門学校2校だけ。神奈川県平塚市で見学したのは、日本ヒューマンセラモニー専門学校の「エンバマーコース」。18歳から32歳までの学生たちが、遺体の修復と保全技術を理論と実習で習得する。教育期間は2年間だ。卒業すれば、日本遺体衛生保全協会が認定する、遺体衛生保全士の資格が得られる。

学生は講師の手法を見ながら、修復を行う。「自分の大好きな人だったらと思いい、手を動かしてください」と指導するのは宿原寿美子講師。テキサス州立法医学顔復元コースを修了したベテランのエンバマーだ。

美しく見せるアートの要素と、遺族の気持ちを和らげる優しさの要素とを兼ね備えた仕事で、女性の関心を高めているといえよう。ただ、死と向き合う仕事に抵抗感を持つ人は多く、応募を親から反対された学生は少なくない。1年の藤本恭子さん(24)は、「亡くなった人を助けたい」と中学2年でエンバミングを知り、以来、心にしまいでんできた。きっかけは幼なじみ2人を交通事故と病気で亡くしたことだ。高校3年で初めて親に話し、結論は大学4年間で気持ちが変わらなければと承諾を得て、大学に進学。卒業と同時に迷わず入学した。

この日は顔面損傷を修復するために、疑似皮膚を作る実習が行われていた。教卓に置かれた顔の模型は、右ほおの一部がない。欠落した部分をガーゼで埋め、その上にワックスを塗り、ほおを再現する。さらにエアブラシで染料を吹き付け、皮膚の色を整えていく。

「東日本大震災以降、入学資料の請求が増え、7割が女性だ。入試倍率は1.5倍(同校)。若者、特に女性の関心が高まっている。話題になった映画『おくりびと』や大震災を経て、「死を身近な存在として受け止め、亡くなった人と遺族への思いやりを表せる、社会的な仕事に就きたい」との思いがあるから。

お茶の水女子大学大学院で心理学を教える岩壁茂・准教授は語る。「現代の若者は専門家になることに魅力を感じている。エンバミングは特異な仕事であり、個人のアイデンティティとして、大きなインパクトを持っているのではないか。その道を目指す多くの人が女性であるのもうなずける」。美しく見せるアートの要素と、遺族の気持ちを和らげる優しさの要素とを兼ね備えた仕事で、女性の関心を高めているといえよう。



右ほおの一部がない欠落部分をエンバミングで再現する女子学生

棺で生きることを実感 募集後すぐに満員御礼

終活の最終形といえるのが、実際の棺おけに入る「入棺体験」だろう。暗い雰囲気はなく、明るく楽しく棺に収まってみる試みが盛況だ。主催するのは、終活カウンセラーの坂部篤志氏(50)と、段ボールメーカーであるウイルライフ代表の増

田進弘氏(60)。今年2月に終活勉強会を開いた際、入棺イベントを実施し、好評だったという。そこで毎月、入棺体験の開催となった。「参加募集はフェイスブックでの告知。会場の関係で7人限定ということもあり、すぐに埋まってしま(坂部氏)。終了後、参加者たちが思いのままに書き込みをするので、口コミで次々に広がるようだ。体験できる場所は、東京・西麻布にあるウイルライフの社屋。仕事帰りに参加できるよう、19時から始まる。周囲は昼間でも人の往来が少ない場所だ。寂しい夜道、しかも隣は寺という絶妙の雰囲気の中、その一軒だけ電球色がこぼれる。

生きてるうちに棺に入ることで、自分の死や人生を見つめ直す



生活」というドキュメンタリーを作ったぐらいです。

誰でも死から逃げられない

人生における普通とは、仕事をする普通とは、家族と過ごす普通とは。究極すれば、それは普通に老い、普通に死ぬことではないでしょうか。

資産家も貧しい人も、どんな人であっても、死は必ずやってきます。どんなことがあろうとも、逃げられはしないのです。これほど普通であることは、ほかにはないはず。

脚本を書く前には、納棺士の方々にインタビューしました。話を聞いて知ったのは、普通である死に向かい合い、寄り添うということは、普通のことではないという現実でした。『おくりびと』は、その滑稽さをどこか皮肉って、世間に訴えてみたかった作品です。(談)

こやま・くんどう●1964年生まれ。日本大学芸術学部卒。映画『おくりびと』脚本を担当。東北芸術工科大学教授やラジオパーソナリティも。

INTERVIEW

「普通」が通用しないのはなぜか

放送作家・脚本家 小山薫堂

「死」そのものは忌み嫌われるものですが、死は誰もが必ず経験する、普通の出来事です。人それぞれに人生のドラマがあり、時の経過とともに老い、やがて死を迎える。生まれて死ぬのは自然なことです。

それにもかかわらず、普通に死を迎えた人の体に触れることは、特別なことだと思われてしまっている。普通のことなのに、普通と思われないというのは、いったいなぜなのでしょう。私が長く抱いていた疑問です。

私は映画『おくりびと』(2008年、松竹)で、初めて脚本を書きましたが、そこには私なりの別のテーマを込めていたのです。それは「普通」ということです。普通とは何か。学生時代から考え続けており、大学の卒業作品も、「普通の

「お通夜をイメージしている」(坂部氏)から。棺の中で目を閉じると「周りで話す声がよく聞こえる」と参加者は口をそろえる。大手複写機メーカーに勤務する柳澤克彦さん(51)は何かを感じられると思ひ参

加した。「棺のふたが閉まり、暗闇になると、自然に力が抜けた。もっと入っていたかった」。知人の紹介で来た70才の女性は「死ぬまでに整理することが次々浮かんできて」と目標を再発見した様子だ。自分が死ぬなど考えたこともなかったという、大手IT企業を脱サラしたばかりの朝日一恵さん(48)によれば、「驚くほど落ち着きますね。死ぬときはこんな感じなのかな」。棺に入るのは死んでからが常識。それを覆す入棺体験は、日常的に意識しない自分の死と人生を考えさせるのか。やるべきこと、生きることの大切さを、再発見する効果があるようだ。